

— 成人向け —
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

従弟王太子の求婚が
止まりませんっ

王女殿下は 逃げ切りたい 上

Mina Natsumori

目次

サンプル版	王女殿下は逃げ切りたい	上	3
I	王宮にやってきた従弟	3	
II	リリアーヌの悩み	10	
III	ジルベールの悩み	21	
IV	襲われたジルベール	32	
V	リリアーヌ、襲われる	40	
VI	もっと早く治るように	51	

サンプル版 王女殿下は逃げ切りたい 上

I 王宮にやってきた従弟

私は国王陛下と王妃殿下の御子、第一王女のリリアーナ。第一王女といっても、国王陛下と王妃殿下の御子は私だけ。

今日は国王陛下の弟君、王弟のウィンター大公殿下と、その長男のジルベールが登城し、私も顔合わせの謁見に同席している。

「さあジルベール。お前もおふたりにご挨拶なさい」

「こ、国王陛下。王女殿下。ジルベール・ウィンターがご挨拶申し上げます」

「ジル。そう硬くならずともよい。我々しか居らぬ時は伯父様と呼んで構わぬぞ」

「は、はい！ 伯父様！」

ご兄弟でお顔のよく似た国王陛下と王弟殿下。そしておふたりが幼い頃の肖像画にそっくりなジルベール。王族特有の華やかな輝きのある金髪に、母方の血で魔力を持った

瞳は紅玉のように赤い。私より七つ年下の従弟だ。

私の代わりに王座に就くべく、七歳で親元を離れ、王宮で後継者教育を受けることになってしまった男の子。国王陛下の御前で緊張しているようで、王弟殿下の隣でかちこちに固まってしまっている。緊張をほぐしてあげようと微笑みかけると、人懐っこいところがあのか花の咲いたような笑みを返してくれた。

「リリ。見ての通り、ジルはまだ幼い。先に教育を受けていたお前が傍でしっかり支えてやりなさい」

「はい、お父様。かしこまりました」

私以外の御子に恵まれなかった国王陛下と王妃殿下。女の私が跡を継ぐことはできないけれど、もし傍系の王族たちも男児に恵まれない場合は王国法を改正して、私がこの国で初めての女王として王座に就くほかないと言われていた。

幼い頃から後継者教育を受け、そのまま時が過ぎ。私を産んで以来お体が弱っていた王妃殿下は、私が十歳の時に逝去。お父様は新たな妃を迎えることなく、傍系にも男児

が生まれない。もうどこかの家門から王配を娶って、私が女王になるしかないと思われた頃、ウィンター大公家に二人目の男児が誕生したのだ。

王弟殿下との話し合いの末、ウィンター大公家の跡は次男が継ぎ、長男のジルベールを国王陛下の跡継ぎとして王宮で教育する運びとなった。王弟殿下の血をひいた男児。しかも、母方の血で私にはない魔導師の適性まで持っている。危険の多い王座に就くにはこれ以上なく適している子だった。

待望の跡継ぎとして王宮に温かく迎えられたジルベール。私も王女として、彼が無事に王座に就けるようできる限り手助けしようと心に決めた。

ジルベールが王太子になったわけなので、私はもう教育を受ける必要はなかったけれど、国王陛下からジルベールを傍で支えるようにとのお言葉があったので、私も自然と後継者教育を受け続けることになった。

七歳から勉強を始めたジルベールと、物心ついた頃から十四歳まで教育を受けてきた私。ジルベールは一日でも早く私に追いつくのだと、先生の授業を真面目に受け、わか

らないところがあれば私にたずねた。

お昼の間は私と先生がずっと傍で見守り、夜は国王陛下と私、ジルベールの三人で晚餐の席を囲む。けれど、ご両親に会えない寂しさは埋められなかったようで、ジルベールは夜眠れないと決まって私の部屋にやってきた。

「リリ姉様……」

「ジル？ 眠れないの？」

「うん……一緒に寝てもいい？」

「もちろんよ。さあ、どうぞ」

最初のうちは弟ができたようで嬉しかった。けれど、ジルベールは私をお母様の代わりにしているようで、ベッドに入れてあげるときずっと抱きついて胸に顔をうずめてくる。かわいそうに、まだ幼いのに王宮での暮らしを余儀なくされて、ひとりではとても眠れないのだ。

王太子に選ばれたことがどんなに光栄なことでも、こんなに幼い子が親元を離れて平

気でいられるわけがない。もし私が男に生まれていたら、今も本当のお母様に甘えられていただろうに。申し訳ないと思いながらジルベールの頭をそつと撫でた。

「あなたのお父様とお母様にも寂しい思いをさせてしまっているわ。ごめんなさいね、私が王子だったらこんなことには――」

「いや！ リリ姉様が王女様で僕はよかったよ!!」

「そつ、そうなの？」

「そうだよ！ だってリリ姉様が王子様だったら、僕と結婚できないでしょう？」

急に体を起こしてどうしたのかと思ったら真面目な顔でそんなことを言うものだから、私は思わず笑ってしまった。

「うふふ……ジルはとってもおませさんなのね」

今まで何度聞いたか知れない。「王女様が王子ならどんなによかったか」と。

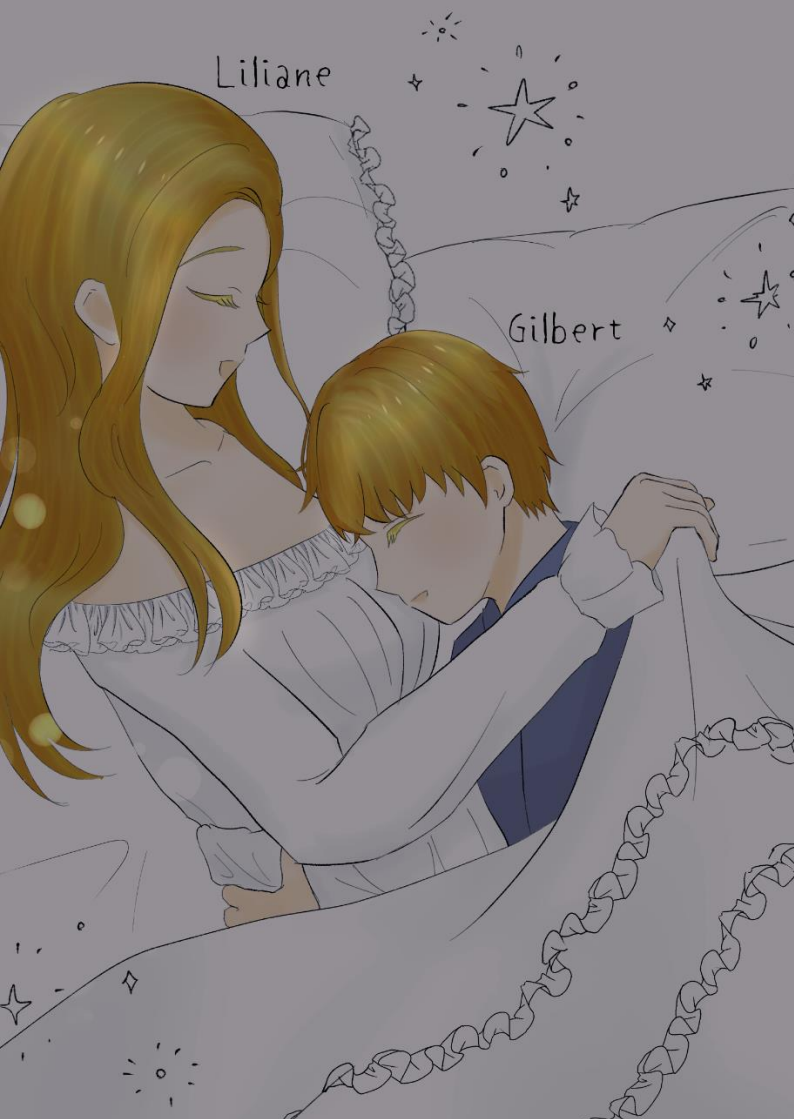
「王女様でよかった」なんてついぞ言われなかった言葉を思いがけずもらい、ジルベールをなぐさめるはずが私の方が元気づけられてしまった。

私が笑ったのを見てかジルベールも笑顔になり、寝転がってまた私の胸に顔をうずめてきた。さすがに眠たくなってきたようで、とろんとした目をしている。

「僕が大きくなったら結婚しようね。他の人と婚約しちゃダメだよ」

「わかったわ。楽しみに待っているわね」

そんな穏やかな夜もあったけれど、私は後々、ジルベールの求婚から逃げる日々を送ることになる。



Liliane

Gilbert

II リリアーナの悩み

季節がいくつも巡り、私の二十歳の誕生日を祝う宴会でのこと。

この国の女性はおおむね十六歳〜二十歳の間に結婚する。二十歳になった本日も婚約すらしていない私は行き遅れまっしぐら。宴会のお喋りも、自然と私の結婚に関する話題になってしまう。

「王女殿下、本日はおめでとうございます」

「ありがとうございます。ジルベールは？」

「外の空気を吸いに行くと。ご一緒できればと思ったのですが、ひとりになりたいとのこと……」

ジルベールの妃候補として最も有力なオブラン公爵家の長女、ベアトリス嬢。ジルベールが社交界にデビューして以来、ダンスのお相手を何度かお願いしているけれど、どうやら今回もジルベールが途中で逃げ出してしまったらしい。

「王女殿下！　この良き日に、何か喜ばしいご発表はありませんかな？」

ベアトリス嬢のお父様、オブラン公爵から陽気に話しかけられるも、表情が暗くなるのを隠し切れない。一番されたくない質問だ。

「……公爵の期待に応えられなくて残念だわ」

「おっと。これは大変失礼いたしました」

「うふふ……いいのよ」

二十歳。節目の誕生日に「私、この方と結婚します！」なんておめでたい発表があってもおかしくないものね。私もそうあってほしかったわ。

苦笑いする私を見て、オブラン公爵は気まずそうにハンカチで汗を拭っている。

「しかし、まったくあてがないというわけではございませんでしょう？」

「……いいえ。そろそろ嫁ぎ先を見繕わなければと思っではいるんだけど」

「コホン。王女殿下にこのようなこと、大変失礼にあたるかと思うのですが、臣として敢えて申し上げます。のんびりしているとあつという間に行き遅れますぞ？」

容赦のない諫言が胸にぐさりと突き刺さった。公爵の言う通り、早く嫁ぎ先を見繕って、せめて婚約だけでもしておきたい。ただ、嫁ぎ先を探したいのはやまやまのだけれど、実はこの頃、国王陛下の体調が優れないのもあって忙しいのだ。

王宮医の先生がおっしゃるには、王妃殿下が逝去なさった後からずっと、通常より多くの政務をこなしてもう十年。ここまでの疲れが溜まりに溜まり、心身ともにひどく消耗なさっている状態とのこと。幸いにも私が後継者教育を受け終わっていたので、お父様のお仕事を手伝ってごまかしごまかしやっている。

ジルベールが元服するまであと二年。なんとかそれまでは……なんて弱気なことおっしゃるものだから、私はこの頃毎日冷や冷や。嫁ぎ先を探すなんて当分無理そうだ。

黙って考え込んでいる私を見てか、オブラン公爵の眼光がギラリと鋭くなった。

「まさかとは思いますが、婿を娶るおつもりではありませんまいな？」

（もう……公爵ったらお祝いの宴会でなんてことを）

私が婿を娶る。ようするに、ジルベールを差し置いて女王になろうと謀っているのだ

はないかと真正面からたずねているのだ。

王座を継ぐのは勿論、ジルベールだ。王太子になって随分と経つのに、どうして公爵が今さらそんなことを気にしているのか。発端はつい先日のこと。ジルベールよりも先に後継者教育を受け終わった私が国王陛下の政務を手伝っている件がどこからともなく広まり、「女性とはいえ直系の御子。やはり王女殿下が国王陛下の跡を継ぐべきだ」と主張する一派ができあがってしまったのだ。

ジルベールを王太子として王宮に迎えたことは、皆が納得の上でそうしたことだし、当然私もジルベールを差し置いて女王になる気はない……という話を、先日の議会ですたのだけれど、公爵はどうも私の話を信じていない節がある。

まあ気持ちにはわかる。万が一、私が婿をとって女王になるなんて言い出したら、娘のベアトリス嬢が王太子妃になれなくなる。公爵にとっては大打撃だ。表では嫁ぎ先が見つかからないなんて言って、実は着々と婿を見繕っているのではないかと勘繰っても仕方ない。そうはいっても、お祝いの席でここまで政治的な問答を仕掛けてくるのは無礼極

まらないけれど。

「……公爵。それはこの間、議会でもはっきり言っただけです。私は女王の器ではないと。皆で王太子殿下を支えてほしいとお願いしたわけですね？」

「ええ、覚えておりますとも。国王陛下がお決めになった跡継ぎと王座を争うなど、穏やかではありませんからな」

「もちろんよ。私が探さないといけないのは婿じゃなくて嫁ぎ先。どこか、隣国にでもちよūdいご縁があるといいんだけど」

「王女様に隣国との縁を結んでいただけると、王太子殿下も助かるでしょうな」

「そうなのよ……少し風にあたって考えてくるわね」

公爵との攻防をさっと切り上げて中庭に出た。少し離れて護衛がついてくる足音が、後ろからかすかに聞こえてくる。

（こういう時、ひとりになれないのが困りものね……）

物心ついた頃からこうだったから、ごく自然なことだけれど。護衛の皆も、こういう

時は何も見ないふり、聞かないふりをしてくれる。

「ふう……困ったわね……」

私がさっさとどこかに嫁いでいれば女王なんて話も出なかった。ジルベールは表に出していなかったけれど、内心冷や冷やしていたのではないかと思う。国王陛下から傍で支えるようにと言われていたし、まだ幼いジルベールを操ろうと近づいてくる者たちを退けるために、元服するまでは傍で見守らなければと思っていた。今回の件はそれが完全に裏目に出た格好だ。

思い返せばこれまで、自分の結婚について準備する時間をほとんど取れていなかった。幼い頃からいざ女王になった時に困らないようにと後継者教育をみっちり受けていたし、十四歳の時にはジルベールが王宮にやってきた。本来なら十六歳になるまでにお茶会や舞踏会に顔を出して結婚相手を見繕うものだけど、見守りも兼ねてジルベールと書斎にこもって勉強して、時間が空いても政務のお手伝い。誰かとお茶を飲む暇もないし、公務で宴会に顔を出しても、私に魅力がないのか誰一人としてダンスに誘ってくれ

ないし……これでは行き遅れぎりぎりになって当然だわ。

（私も相当まずい状況だけれど、もっと深刻なのはジルベールなのよね）

そう。私の行き遅れ寸前問題が非常にまずいのは言うまでもないけれど、私にはもっと困っていることがある。それはジルベールが事あるごとに「結婚しよう」と迫ってくる。幼いからよく分らずに言っているのだと思って、にこにこ返事していたのが良くなかったのかもしれない。

ジルベールがまだ七歳の頃。「僕が大きくなったら結婚しようね」と言われて「楽しみに待っているわね」と返した。ジルベール八歳。「はやく結婚したいなあ」と言われて「うふふ。そうねえ」なんて返した気がする。ジルベール九歳。「そろそろ婚約しよう」とジルベールのサインが入った婚約誓書を渡されたけれど、「もうちょつと大きくなってからね」と差し戻した。まだ女性のことがよくわかっていない幼い男の子がお姉様と結婚したがるなんて微笑ましいエピソードは何度か聞いたことがあるし、十歳になればさすがにもう、私と結婚しようだなんて言わなくなるだろうと思っていたのだ。

けれど、ジルベール十歳。「もう大きくなったから婚約しよう」と言われ「十歳はまだ子供だから」と返した。ジルベール十一歳、「僕と婚約してください」と公衆の面前で突然プロポーズを強行され、「あら、プロポーズの練習？　えらいわね！」となんとかごまかした。

そしてジルベール十二歳。社交界デビューの年、初めての舞踏会でベアトリス嬢をダンスのお相手にと連れて行ったら、「リリ姉様じゃないと嫌だ!!」と控室で癪癪を起され、その日は仕方なく私がダンスパートナーを務めることに。オブラン公爵から大いに睨まれてしまったし、ベアトリス嬢にも悪いことをしてしまった。

私の胸くらいだったジルベールの背はそこから急激に大きくなり、十三歳になった今、私が踵の高い靴を履いてようやく同じ目線。鮮やかに追い抜かれてしまった。

いよいよ大人びてきたけれど、私と結婚する気満々なところだけは幼い頃から少しも変わらない。というより、だんだん激しくなってきた。この間なんて、書類の間に婚約誓書が入っていて、うっかりサインしかけた。今日も私と一緒に入場すると言って

聞かなかったところを、国王陛下の近衛騎士、エース侯爵家のダグラス卿に入場のエスコートとファーストダンスを依頼して、ジルベールの元には支度の整ったベアトリス嬢を差し向けたのだ。残念ながらまったく距離が縮まらなかったみたいだけれど。

（別にジルと結婚するのが嫌で逃げているのではないけど……）

王宮で生まれ育った私なら勝手もすべて分かっているし、後継者教育を受け終わっているから、妃教育の必要もない。明日からでもすぐに政務をこなせる点は、むしろ適していると言えるだろう。ただ、年の差がありすぎるのが非常に問題なのだ。

例えば三十歳頃まで頑張ってお世継ぎを作るとする。ジルベールが元服してすぐに結婚したとしても、私は二十二歳。つまり八年しかない。対して、同じ年頃の令嬢を王太子妃に迎えれば、十五年くらいかけてゆっくりと御子を育めるわけだ。

若い令嬢と結婚するほうがお世継ぎを作る時に安心なのよと説得したいけれど、そういう話は元服してからと思うとまだ話せない。ただ、このままのらりくらりと逃げるだけではジルベールの結婚しよう攻撃に押し切られてしまうのではという不安が。

従弟だから結婚できてしまうというのもまた困りものだ。従弟ではあるけれど、これまで本当の弟というか、どちらかというと息子のように見守ってきた。それなのに結婚だなんてどうも想像がつかないし、そもそも今の代で直系の御子が王女の私だけだったために色々大変だった。勿論、ジルベールも大変な目に遭ったうちのひとり。これ以上ジルベールが苦勞しなくて済むよう、彼の治世ではぜひお世継ぎに恵まれてほしい。（なんとかして若い令嬢との縁談を成功させないと……!）

それがお母様代わりの私がすべき、最後の務め。けれど、せっかく縁談を持って行っても、私と結婚するのになんで他の令嬢と婚約しないといけないのかと、全然言うことを聞いてくれない。そして私に婚約しろと迫ってくる。

かくなる上は、私と結婚してくださる殿方を見つけて婚約……したいけれど、今はそんなことをしている暇がない。そして悩みはふりだしに戻る。

「はあ……なんとかこのまま逃げ切りたいけれど……」

その時、私が歩いていた先から甲高い悲鳴が聞こえてきた。

「きゃあああああ！」

「なっ!? 誰かしら!？」

夜の中庭を切り裂くような、若い令嬢の悲鳴。ここからそう離れていない。

護衛たちがバタバタと駆けてくる音と、辺りの木々がガサガサッと揺れる音が重なった次の瞬間、悲鳴の主と思わしき陰が宙に現れた。どこの令嬢か暗くてよくわからないけれど、何か縄のようなもので体を縛りあげられて空中ではりつけにされている。

「あれは……拘束魔法だわ！」

「王女殿下！ 我々の後ろに！」

緑色に透き通った、葉のない蔓植物つるのような形。

細長く放出した魔力を自在に操って相手の身動きを封じる、ジルベールが最も得意とする魔法。彼の身に何か危険が及んだのだ。

護衛の後ろについていくと、息を切らしたジルベールが木に寄りかかっていた。

III ジルベールの悩み

僕——ジルベール・ウィンターは頭を冷やそうと、宴会場を抜け出して中庭に向かっていた。

「……ねえ。ついて来なくていいよ。僕の方が強いってわかってるでしょ？」

「はっ。しかし規則でございますので」

「じゃあ全員、僕の代わりに王女様を見張ってきて。悪い虫がつかないようにね」

「御意。くれぐれもお気をつけください」

後ろをついて来ようとする護衛たちを宴会場に戻らせ、ひとりで中庭を歩く。

「ちっ……なんでよりもよってダグラスなんかと」

今日は僕の従姉、リリアーナ王女様が二十歳になるめでたい日。お祝いの宴会でエスコートするのを楽しみにしていたのに、なぜかその役目を国王陛下の近衛隊に所属する騎士——エース侯爵家の嫡男、ダグラス・エースに奪われてしまった。

僕より背が高く、筋肉もあって、顔もそこそ整っている。二十五歳、独身。リリ姉様と一緒に入場して、最初のダンスを踊った憎き男だ。リリ姉様は婚約者が居る奴と既婚者を避けた結果、偶然ダグラスを選んだだけだろうけど、あいつはこの上なく嬉しそうだった。

そのせいで僕の気分は最悪。リリ姉様をエスコートできないばかりか、「大丈夫よ。あなたのダンスパートナーも呼んでおいたから」と、オブラン公爵家のベアトリスを押しつけられた。誘ってもないのに僕の行く先々に現れ、隙あらば僕との距離を縮めようとしてくる、蛇みたいにしぶとい女。ただ、僕に近づこうとする令嬢を勝手に撃退してくれるところだけは大いに役立っている。

とりあえずベアトリスを隣に置いてリリ姉様が楽しそうにする姿を眺めていたけれど、ダグラスと体が近すぎるし、リリ姉様の胸元や露わになった背中をじろじろと見てくる奴らの両目を潰して回りたくなるしで、一旦中庭に出てきたというわけだ。

誰も居ないのをいいことに、僕は中庭の奥にある噴水の縁に腰かけた。口を少しで

も開くと、延々と溜息が漏れてしまう。

（はあ……今日こそは婚約してもらえと思ったのになあ……）

親元を離れ、王宮で暮らして早六年。最初の頃こそ「弟が生まれて僕が要らなくなつたのか」、「なんで弟じゃなくて僕なんだ」なんて落ち込んでいたけれど、国王陛下とリリ姉様にご挨拶した時、選ばれたのが僕の方で良かったと心底思った。この女神様みたいな人が僕の伴侶になるんだって。

たったひとりの王女様なのにとっても気さくで、僕が寂しがっているふりをするとは簡単にベッドに入れてくれた。「弟しか居ないからリリ姉様と呼んでいいか」と聞くと、快く許可してくれて、僕のこととシルと呼んでもらって。誰の目から見ても仲睦まじく、僕の後継者教育も順調そのもの。剣と魔法の鍛錬にも励んで、今ではもう護衛騎士より強いくらい。ただ、順風満帆な王宮生活でひとつだけ上手くいっていないことがある。リリ姉様への求婚だ。

僕はちゃんと覚えている。「大きくなったら結婚しようね」と言ったら、リリ姉様は

「楽しみに待っているわね」と返してくれた。それ以来、伯父様のような賢王、かつリリ姉様の良き夫になるべく頑張ってきたのに、リリ姉様は今日に至るまで、僕の求婚からのりりくらりと逃げ回っている。

最初の頃はまだ僕が幼いから、大きくなったら正式に婚約してくれるんだと思っていた。けれど、十歳になっても「まだ子供だから」で済まされ、十一歳、十二歳、十三歳と年を重ねても「うふふよしよし良い子ねえらいわ」という感じで、生涯の伴侶になる雰囲気か微塵もない。

そもそも、僕を男として見てくれない気すらする。背だつて今はもう僕の方が少し高いくらいだし、剣術の稽古でそれなりに筋肉もついている。にもかかわらず、リリ姉様に抱きついても特に今までと変わらない。従姉というより最早母親の域だ。そうはいっても、リリ姉様も今日で二十歳。

二十歳と言えばこの国の女性でいうところの適齢期ぎりぎりだ。さすがにそろそろ結婚しないとまずいだろう。今日こそはきっと、僕と婚約してくれるはず。もしかす

ると僕が元服する日に結婚しようって言われるかもしれない。

……なんて楽しみにしながらリリ姉様を迎えに行ったのに、婚約の話はおろか、今日のパートナーはダグラスに頼んであるのだと言われた瞬間の僕の絶望たるや。すぐに始末してやりたかったけど、国王陛下の近衛騎士だからさすがに手を出せなかった。

エスコートできないならせめてダンスだけでも一緒にと思ったのに、リリ姉様は僕の誘いを「もうちょっと大きくなってからね」と笑顔で断った。リリ姉様がもう少し踵の低い靴を履けば僕の方が大きいのに。本当にひどい仕打ちだ。

（まあこの程度でリリ姉様のことを嫌いになったりはしないけど……）

王宮での生活は僕にとって危険が多かった。今でこそ護衛も要らないようになったけれど、今の僕があるのはリリ姉様が傍で守ってくれたおかげだ。

普段は何でも知っているお従姉様。お仕事をなさる時の凛としたお姿はずっと眺めていたくらい素敵だし、僕に余計なことを吹き込もうとしてくる輩を追いつく時の毅然とした態度もすごく格好良い。うちに弟が生まれていなかったら女王になっていた

たはずのお方。その辺の当主はリリ姉様が現れただけでそそくさと逃げていくくらいだ。そんな厳しい一面もあるのに、僕にはとても優しい。これで好きになるなという方が無理というものだろう。

僕の中ではリリ姉様への愛が年々積もっていくばかりだけれど、なんでリリ姉様は僕が結婚しようという度に逃げてしまうのか。そろそろ僕のことを夫として扱ってくれてもよくないだろうか。まあリリ姉様はお堅いから、僕が元服するまで待とうと思っておられるのかもしれない。けど婚約だけなら、元服前にしても別に問題ないと思うんだけどな。

「はあ……国王陛下だって『傍で支えてやりなさい』っておっしゃってたのに。本当に僕と結婚してくれるのかなあ」

溜息をついていると、向こうから足音が近づいてくるのが聞こえた。踵の高い靴で石畳をコツコツと歩く音。リリ姉様が僕を探しに来てくれたのかと思って慌てて立ち上がったけれど、残念ながら違った。

「ごきげんよう王太子殿下。今日も王女殿下に振られてしまいましたのね？」

「ちっ。またお前か」

「お前だなんて。私にはちゃんとドロシア・レインという名前がございますのに」

ベアトリスが撃退するのに手こずっている、レイン伯爵家の長女ドロシア。ドロドロとしつこい女だ。父上とレイン伯爵の仲が良いので、僕もあまり邪険にできない。

「何度も言っているがいい加減目障りだ。ああ、その不愉快な面を僕が二度と見なくて済むように、首を差し出しに来たんだな？」

言えてもせいぜいこの程度。いや、普通の令嬢ならこう言って睨みつければ泣きながら逃げていくけど、こいつには効かない。

「うふふっ。殿下はお年を経る毎に迫力が増して。素敵ですわぁ♡」

この通り、何を言ってもこちらが苛々するだけ。つまり無視するに限る。僕が無言で噴水の縁に座ると、許可してないのにドロドロ女が隣に座った。

「それにしても、本日の王女殿下は何と言いますか……殿方を惑わす気満々のドレスを

お召しになっておられましたわね？」

こいつの話題はほとんどがリリ姉様に対する妬みだ。ただ、この話はわからなくもない。リリ姉様は昔から、胸元や背中が広くあいたドレスを好んで着る。結婚すると公の場では露出の少ないドレスを着るようになるので、令嬢たちにとって肌が見えるデザインのドレスは若いうちだけの楽しみ。リリ姉様も多分、他の令嬢たちと同じように若い令嬢ならではの着こなしを楽しんでおられるのだと思う。ただ、リリ姉様の場合は男の目を惹きすぎる。僕の前だけならいいけれど、公の場で露出の多いドレスを着るのはそろそろやめてほしいなと思っていたところだ。

まあ、いくら同感でも会話するとドロドロ女を調子に乗せてしまう。僕が黙っていると隣から扇子を開く音が聞こえてきた。

「こうなってくると現実味を帯びてまいりますわね。父から聞きましたわ。なんでも、王女殿下が王座に就くために、婿を探しておられるなんて噂があるとか」

さすがに無視できず睨みつけると、興味を持たれたと思うたようで、扇子で口元を隠

していてもわかるほどにやりとされた。

「あら！　やはり王太子殿下も気にしておられたのですね？」

少しでも反応したのが失敗だった。再び顔をそむけるも、ドロドロ女のくだらない話は続く。

「そんなにご心配なさらずとも。仮に王女殿下が婿を娶ったとして、王太子殿下が先に世継ぎをお作りになれば、皆が喜んで味方してくれますわ」

無視を貫きたかったけれど、これはさすがに全否定だ。まずリリ姉様が僕を差し置いて女王になることはない。議会でご本人がそう表明なさったし、そもそもリリ姉様は僕と結婚して王妃になる。だから婿を娶るなんてありえないのだ。

「……ちっ。言っておくけど、王女様は僕と——」

仕方なくドロドロ女の方に顔を向けた瞬間、口の中に硬いものが押し込まれた。喉に液体が流れ込んでくる。

「っ……!!?　コホッ……!!」

すぐに吐き出そうとしたけど遅かった。ドロドロ女は小さな瓶を片手に噴水の周りをびよんぴよんと飛び跳ねている。

「ああよかった！ 失敗したらどうしようかとハラハラしましたわ」

「貴様……!!」

「私の名前はドロシアですと何度言えば……殿下の御子を宿して妻になる女性を、貴様だなんて呼んではいけませんわ」

（……………媚薬か！）

ドロドロ女の不愉快な笑みと言い草で察しがついた。もう精通を迎えてしまっている僕にとって、下手をする毒薬よりまずい薬だ。大人の体になってリリ姉様との結婚に一步近づいたと思っていたのに、まさかこんな奴に襲われるなんて。

警戒を怠ったことを悔やむ間もなく、ドロドロ女が近づいてくる。

「こんな場所で申し訳ないですけど、涼しくてよろしいと思いますわ。その薬、即効性に優れていて、すぐに体が熱くなるそうですから。お加減はいかがですこと？」

「さっ、触るな汚らしい！」

「ひっ……！ なっ、何ですのこれは……!?」

拘束魔法で手足と胴を捕らえ、僕に触られないよう空中ではりつけにした。

「きゃあああああ！」

けたたましい悲鳴が辺りに響き渡るも、恐怖で失神したのか悲鳴はすぐに途切れた。胴体から足までぐるぐる巻きにして地面に転がす。即刻始末してやりたいのはやまやまだけれど、一旦牢屋に入れて取り調べを受けらせなければならぬ。

とりあえずこいつは放っておいて、問題は僕の体だ。こんな状態で他の令嬢に見つかりうものなら何をされるか分かったものではない。そして最悪の場合、僕の方が何かしでかしてしまうかもしれない。僕がそんなことをしたいのはリリ姉様だけなのに。

薬が回りきる前になんとかリリ姉様のところまで戻らなければと思うも、足が言うことを聞いてくれない。体が熱い。

たまらず木に寄りかかっていると、向こうからばたばたと足音が近づいてきた。

IV 襲われたジルベール

「ジル！」

「あっ……リリ、姉様……」

ジルベールの体がこちらに倒れてきたところを、間一髪で抱きとめた。体が熱い。

「何があったの!? さっきの拘束魔法、あなたのよね？」

「僕、レイン伯爵令嬢に何か、薬を飲まされて……」

「……あなた、王宮医を呼んでちょうだい！ あとすぐに飲み水を。それから、私たちはレイン伯爵令嬢を捕らえてきて！」

「はっ！」

指示を受けて散り散りになる護衛。ジルベールは私の胸に顔を埋めて苦しそうに息をしている。

「ジル？ どうすれば楽？」

「服、苦しい……」

「わかったわ。緩めるわね」

礼服の上着を脱がせ、首に巻かれていたクラブットをほどく。シャツのボタンもいくつか外してみたけれど、ジルベールの呼吸は相変わらず苦しそうなままだ。

「王女殿下、お水を！」

「ありがとうございます。ジル、飲んで。薬を薄めないと」

「う、うん……」

水を飲むのすら苦しそうで、時折咳き込んでしまう。ジルベールの背中をさすっていると、続々と護衛たちが戻ってきた。

「王女殿下！ レイン伯爵令嬢は気絶しておりましたので牢に。それから、こちらの瓶が見つかりました」

「まだ少し残っているわね。お医者様がいらしたら見せましょう」

「リリ姉様……熱い……助けて……」

(ど、どうすればいいの……?)

まだお医者様は来ていないし、お水はたくさん飲ませた。あとは楽な体勢にさせて、声をかけ続けるくらいしかできないことがない。

「ジル、しっかり！ もうすぐお医者様が来るからね」

背中をさすりながら声をかけ続ける。脈はしっかりあるけれど、体が異常に熱い。なんの薬か見当がつかないまましていると、王宮医の先生が中庭に走ってきた。

「王女殿下！ 大変お待たせいたしました！」

「先生！ これを飲まされたみたいで……」

レイン伯爵令嬢が持っていた瓶を渡すと、先生がすかさず蓋を開けた。手であおぐようにして薬の匂いを嗅いでおられる。

「先生、ジルベールは……」

「……大丈夫です！ 命に係わるものではありません。ただ、早くお部屋に運んで安静にしなければ」

「よかった……誰か、ジルを宮に運んでちょうだい」

命に別条がないのだとわかり、とりあえずほっとした。大柄な護衛に抱き上げられて、ジルベールが運ばれていく。王宮医の付き添いがあればひとまず安心だ。

「あとは先生にお任せして、私は宴会を続けるわ。帰ろうとする者は呼び止めて調べてちょうだい。それから、レイン伯爵を私のところに連れてきて。令嬢が目覚めたら彼女とも話したいわ」

誕生日を祝う宴会の水面下で進む取り調べ。レイン伯爵令嬢がジルベールに飲ませた薬はなんと媚薬。最悪なことに、レイン伯爵が入手した代物だった。

「ふう……国王陛下とジルベールになんと説明すればいいやら」

「申し訳ありません……娘の想いを実らせてあげたい一心であんなものを……」

「親心は分からなくもないわ。けれど、本当にまずいやり方を選んだわね。あなたが彼女に協力していなければこんな大事にはならなかったのに……」

レイン伯爵の方はすぐさま自供した上で、こちらがかわいそうな気持ちになるほど真

摯に謝罪してきたけれど、牢の中で目を覚ましたレイン伯爵令嬢は、私に対して不敬な態度を露わにした。

「あなたね。いくら振り向かせたいからって、お父様に媚薬を手に入れてくださいなんて頼む？ 殿方の貞操を無理やり奪おうだなんて卑劣な真似、恥を知らない！」

「王女殿下にだけはお説教されたくありませんわ！ そうやって体を強調するようなドレスばかり着て、王太子殿下のお傍にべったりはりついてるくせに！」

「なっ!? あの……えっ？」

「とぼけたって無駄ですわ。王太子殿下は口を開けば王女殿下のお話ばかりで、私になんかちつとも見向きしてくださらないのです！ 王女殿下がその豊かなお胸で毎日誘惑しているせいで！ わたくし、ぜえつたいに！ 謝りませんからね!!」

「そっ……そう……」

国王陛下から処分が下される前に反省を促しておこうと思ったのに、なぜか罵られてしまった。盛ったのが毒ではなかったにしろ、王太子の体に危害を加えようとした罪は

重く、臣として信頼を置いていた良家と一緒に、ジルベールの婚約者候補もひとり消えた。事件の真相はわかったけれど、何とも気分の重たい夜になってしまったのだった。



調査が無事に終わったところで宴会をお開きにし、国王陛下に顛末を報告して、私も自分の宮に戻った。楽な服に着替えさせてもらって、宴会が早く終わった分、少し政務を片付けようと執務室に向かう。その途中、後ろから慌ただしい足音が近づいてきた。

「お、王女殿下！」

「……先生？　どうなさったのですか!？」

私を追いかけてきたのは、ジルベールを診てくださった王宮医の先生だった。どうい
うわけか髪が乱れ、眼鏡にひびが入っている。その姿を見て私はようやく、まだ事件が
解決していないことを認識した。

「……ジルベールに何か？」

「はい……歩きながらご説明しますので、とにかく王太子殿下の宮に」

「ええ！　行きましよう！」

先生がおっしゃるには、薬で苦しむジルベールの世話をしようとなると、拘束魔法が発動して部屋の外に追い出されてしまうらしい。騎士でも力負けするほどで、今はもう全員が追い出され、扉すら開かない状態だそうだ。

ジルベールの部屋の前に着いてみると、ウィンター大公家から連れてきていた昔からの侍従までボロボロだった。

「申し訳ありません王女殿下。我々が至らないばかりに……」

「いいえ、よく頑張ってくれたわ。ジルはそんなにひどいの？」

「はい。お着替えが済みましてベッドで安静にしていたかどうかと思いますが、横になられても非常に苦しそうな様子で。王女殿下をしきりに呼んでおられました」

「そう……先生、もし部屋に入れたらどのようにすれば？」

「毒ではありませんので解毒薬がないのです。とにかくお水をたくさん飲ませて、薬の

効果を薄めるしかありません」

「わかりました。声をかけてみます」

皆には少し後ろに下がってもらい、部屋の扉をノックする。

「ジル、私よ。大丈夫？」

声をかけた途端、扉が勢いよく開いて拘束魔法の蔓が私の胸をぐるりと絡めとった。

「きゃっ！」

「王女殿下——」

後ろから王宮医の先生が叫ぶ声が聞こえたけれど、私を部屋の中に素早く引き入れた蔓がすぐさまドアを閉め、両開きの扉の取っ手にぐるぐると巻きついた。なるほど、これでは外から扉が開かないわけだ。

私だけでも中に入れて良かったなんて思っていたけれど、正確には部屋に「入れた」のではなく「閉じ込められていた」のだと、後に知ることとなる。

V リリアーヌ、襲われる

明るい部屋の中で、ベッドには天蓋のカーテンがひかれている。カーテンを少しだけ開けてベッドの上を見ると、ガウン姿のジルベールがうつ伏せで横たわっていた。苦しそうにはあはあと息をしている。

「ジル！ 苦しいの？」

「あっ……リリ姉様？」

「ええ。お見舞いにきたわ——」

バツと体を起こしたジルベールが勢いよく飛び出してきて、慌てて抱きとめた。まだ体が熱い。

「リリ姉様！ やつと来てくれた……！」

「私を待っていたの？」

「そうだよ……どうして来てくれなかったの？」

「ごめんなさいね。あなたが飲まされた薬の出どころを調べていたのよ」

「そっか……」

ベッドに腰かけてぎゅっと抱きしめてあげると、ジルベールは安心した様子で私の胸に顔をうずめた。かわいそうなことに、頬から耳にかけて肌が真っ赤に染まり、目の端には涙のあとが残っている。泣いてしまうほど苦しんでいたようだ。

（まったく、レイン伯爵令嬢はなんてひどい薬を……）

こんな状態にして襲ってしまおうなんて恐ろしい。もしジルベールが拘束魔法を使っていなかったらと、想像するだけでぞっとしてしまう。

「ジル。先生がね、お水を飲んだら楽になるからって」

そう言いながらベッド脇に置いてあった水差しに手を伸ばそうとするも、ジルベールの両手が私の頬にやってきて、ぐいと正面を向かされた。

「んっ？」

すぐそこにジルベールの顔があって、唇に温かいものが触れている。

ちゅっ♡ちゅっ♡と柔らかな感触を自分の唇に繰り返して感じて、ようやく口づけされているのだとわかった。

「んっ♡ はぁ♡ リリ姉様……ちゅっ♡」

「……っ！ ジル、待っ……あっ！」

逃げようとする私を、ジルベールは左腕で抱きしめ、余った右手で後頭部をがっしりと掴んだ。力が強くて逃げられない。そのうち、押しつけられていた唇から舌がぬるりと入ってきた。

「んっ!? んうっ……ジル、やめっ……んんっ♡」

「あむっ♡ リリ姉様♡ じゅるっ♡」

口の中をジルベールの熱い舌が動き回っている。これはもしかや、結婚してからするよな大人の口づけなのでは？ この子、一体どこでこんなことを……

そんなことを悠長に考えているうちに、私の舌はジルベールの舌に絡めとられ、じゅうじゅうと吸われ始めた。頭の奥が痺れるような感覚。恥ずかしいことに、唇と唇が触

れ合うことすら初めてだった私に舌を絡める口づけは刺激が強すぎたようで、急に体からカクンと力が抜けた。

「おっと。ふふっ……かわいいリリ姉様……好きだよ♡」

かわいそうに。この子、薬のせいで私に口づけしてしまうなんて。早く水を飲ませて効果を薄めないと。

力が入らない体に鞭をうち、ジルベールの腕の中からなんとか抜け出した。

「あ、あのねジル。今みたいなキスは結婚する相手とするものなのよ」

そう言いながらグラスに水を注いでいると、後ろからジルベールがぎゅっと抱きついてきた。耳にちゅっちゅっ唇を寄せられている。

「うん♡ 結婚しようね♡」

「しないわ。さあ、お水を飲みましょうね」

「……なんで？」

「えっ？」

ジルベールの声が聞いたこともないほど低くなり、私は思わずグラスに水を注ぐ手を止めて振り返った。ジルベールの赤い瞳が怒りでごうごうと燃えているように見える。

「なんでって聞いているの。リリ姉様は僕と結婚するんだよ？」

「えっ……えっ……」

有無を言わさぬ迫力に、うまく言葉が出てこない。水差しを一旦サイドテーブルに置き、ジルベールの方に向き直った。薬のせいでも言動がおかしい。けれど、ここは適当に誤魔化さずちゃんと話した方がよさそうだ。

私は自分を落ち着けるために、大きく息を吐いた。

「ふう……あのね、ジル。私、どこか隣国に嫁ごうと思うの」

「なんで？」

「そうすると隣国との繋がりができて、交易が盛んになったり、いざというとき協力し合えるの。ジルが国王陛下から譲位された時に、力になれるということよ。いい嫁ぎ先が見つかったらお祝いしてちょうだいね」

「嫌だ!!」

「えっ……ど、どうして? お祝いしてくれないの?」

「どうしてって聞きたいのは僕の方だよ。リリ姉様は僕と結婚するって言ったのに、どうして他の奴と結婚するの!」

「それはまだジルが小さい頃のお話でしょう? こんなに大きくなったんだから、もうわかるわよね——きゃっ!」

真面目な話の途中で、私は急に腕を引っ張られるのを感じた。拘束魔法の蔓が巻きついていて。あつという間に両腕を後ろにまわされ、胴体と一緒にぐるりと縛られてしまった。身動きを取れなくなった私の胸元に、ジルベールの手がのびてくる。

「なっ、何を……」

胸元の布を鷲掴みにされたかと思ったら、勢いよく引き下ろされた。ドレスと一緒に下着までついていき、両胸がふるんと露わになってしまう。

「ひっ!? えっ? ジル? っ♡!」

慌てふためく私の胸にジルベールの顔が近づき、乳首をぱくりと口に含まれた。そのままじゅうじゅうと吸われ、私をさらなる驚きが襲う。

えっ!? こ、この子ったら、急にどうしたのかしら。まさか薬の苦しみで急にお母様の胸が恋しくなったの？ でも私、お乳は出ないんだけど……？

何も出ていないはずなのに、ジルベールは私の胸を美味しそうに吸っている。あまりにも夢中になっていて、声をかけるのがためらわれるほどだ。

「あっ……あのね、ジルっ、そんなに吸っても」

「何も出ないって？」

「そ、そうよ。母乳は御子ができた時に出るものであって……あっ♡」

唾液で濡れた乳首をこりこりと弄られ、あられもない声が出てしまった。口を覆うにも、両手を拘束されていてどうにもできない。もう片方の乳首も吸われると、ぎゅっと閉じた口からどうしても声が漏れてしまう。

「んっ♡ ひうっ♡ ジル、それやめて……!」

「ふふっ……何も出ないって、リリ姉様は僕をいくつだと思ってるの？ 母乳が恋しい時期なんて王宮に来た時にはとくに終わってたんだけど」

「えっ？ で、でもあなた、私の胸によく顔を……」

（……確かに!!）

そう言われてみれば、もうお乳を飲む年頃はとくにすぎていた。かといってお母様と一緒に寝るような年でもなかった。じゃあ私のベッドに入って来ていたのって……？

まだ幼いジルベールに甘えられているのだと思い込んでいた数々の場面が脳裏をよぎる度、額にじわり、じわりと汗がにじみ出る。

ジルベールは私の反応に満足したように、にこにこ笑っている。

「やっとなづいてもらえた？」

「……何かの冗談よね？」

「ううん？ 僕は常に真剣だよ♡」



いつも通りのかわいい笑みと一緒に知らされた残酷な現実に、今にも気を失いそうだ。胸に顔をうずめられたり、胸を揉まれたりする度に、お母様が恋しいんだなかわいそうに思っていた。けれど、そうではなかったのだ。あれが全部、破廉恥な行いだっただけで信じられない。

「はあ……やっと男に見られて嬉しいよ。どんなにいやらしく抱きついても全然気づいてくれなかったもんなあ……」

しみじみと喋りながらも、ジルベールは私の胸をふにふにと揉みしだいている。あまりにいやらしい手つきに頬がカッと熱くなる。誰なのこの破廉恥な子は。未婚の女性にベッドでいかがわしいことをするなんて、おませさんでは済まされない。

「ひ、ひどいわ！ 私、寂しくて甘えてるのかと思ってたのに……！」

私が声を荒げて、ジルベールは飄々と返しながら乳首をこりこりと責めてくる。

「ほーんと、ひどいよねえ。僕に『楽しみに待ってるわね♡』って言ったくせに、いまだに婚約すらしてくれない人」

「あっ♡ あれはまだ、小さかったから……っ♡」

「えー？ 僕、大きくなってもずっと言い続けてるよね？」

「ひうつ♡ そ、それは……まだわかってないのかなと、思ってる……」

「……へえ。本当に、どれだけ僕のこと子ども扱いすれば気が済むのかなあ」

楽しそうに胸を弄っていたジルベールの眉間にだんだんと皺が寄り、ついには不愉快そうに私の胸から手を離した。

「……まあいいや。リリ姉様に見せてあげるよ。僕がもう大人だって」

そう言ったかと思うと、ジルベールはガウンの腰紐をするりとほどいた。

VI もっと早く治るように

「ほら見て。薬のせいでずっと硬くなったままなんだ」

「っ……!!」

ジルベールがガウンの前をくつろげた瞬間、現れた禍々しいものに目が釘づけになってしまった。ジルベールの足の間からのび、お腹につきそうなほど天に向かってそそり立つ、太く長い茎。先端はさらに太く、表面には薄暗くてもはっきりわかるほど血管が浮き出ている。殿方の秘められた場所を見るのが初めてなので、見せられたところで子供のそれか大人のそれか、私に分かるはずがない。けれどジルベールのそれは、何も知らない私から見てもひどく凶暴そうなものに映った。

私によく見せようと思ってか、ジルベールが淫茎に手を添えて、私の目の前に差し出してきた。

「ひっ……来ないで!!」

ぎゅっと目をつむって顔を横に向けると、ジルベールの楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

「あははっ！　ひどい反応だなあ。でも嬉しい。男のものを見るの初めてなんでしょ？」

「そっ、そんなところ、結婚してからじゃないと見ないでしょ!？」

「そうだね。リリ姉様は僕と結婚するから、好きなだけ見ていいよ♡」

「見せてくれなくて結構。早くしまつてちょうだい」

「ちえっ……」

残念そうな声が聞こえたかと思うと、私を縛っていた拘束魔法が突然ほどけた。これ幸いと急いで背を向け、下着と服をぐいと引きあげる。露わになっていた胸が隠れて一旦ほっとするも、後ろを振り返ってみるとジルベールがぐったりとベッドに横たわっていた。苦しそうな様子を見ると途端に心配になってしまう。

「……ジル？　大丈夫？」

「はあ……はあ……どうしよう。すごく苦しく、なってきた……」

「あっ！ お水を……」

「うん……お水を飲むより、もっと早く楽になる方法があるって先生が……」

「そうなの？ どうしたらいい？」

「こっちにきて、手伝ってくれる……？」

そう言いながら、ジルベールは苦しそうに体を起こそうとしている。すぐに近寄って背中を支えようとしたけれど、ジルベールに右手を掴まれ、そのまま足の間に導かれた。

「ひっ!？」

ジルベールの手で淫茎をぎゅっと握られ、その硬さと熱さに慄いた。私が固まっているのも気にせず、ジルベールは私の手を包み込み、淫茎をしごくように上下に動かしている。

「っ♡ リリ姉様の手、柔らかくて気持ちいい……♡」

「なっ、何これ!? こんなことで楽になるの？」

「うん♡ すごく気持ちいいよ♡」

「そ、そう……」

本人が言うならこれで良いんだろうと思ったけれど、突然男根を握らされた驚きがおさまって冷静になってくると疑問が湧いてきた。私に淫茎を掴ませて、器用に上下させているジルベールの手。別に私の手でなくとも、自分ですればいいように思える。

「あのね、ジル。これって私の手でする必要があるのかしら」

「あるよ♡ 自分の手よりも早く楽になれるから」

「……そうなのね」

どう見ても私の手より優秀そうだけれど、ジルベール本人が言うからには私がした方がいいんでしょう……ね？

まだまだ疑問に感じながらも、とりあえず握らされるがままにジルベールの淫茎を手でずりずりと擦りあげた。

こんなに強く握っても大丈夫なのかだんだんと心配になってくるも、ジルベールの目はうっとり細められ、気持ちよさそうに声を漏らしている。

「はあっ♡ リリ姉様の手が良すぎて、もう出ちゃいそう……手に出してもいい？」
そうたずねられるも、情けないことに何ひとつ状況がわからない。思い返せば殿方の体に関する何を何も習っていない気がする。

そうだわ。女王になった時のためにと後継者教育を受けていた頃、殿方の体について知ることはお世継ぎを作るうえでとても大事ですから、成人してから詳しくお教えしますねと言われて、そのすぐ後にジルベールが王宮にやってきた。

結局残りの教育も受けたけれど、房事については「ご安心ください。ご結婚なさるお相手にすべてお任せすれば大丈夫ですよ」と言われるに留まったのだった。出すって多分、子種をとってことよね？ 手に出すってどういうこと？

よく分からない。けれど、ジルベールの切羽詰まった様子にとりあえず無言でこくくと頷いてみせると、ジルベールの体がびくりと震えた。

「——っ♡」

「きゃっ……！」

一瞬、ジルベールが息を詰まらせたかと思うと、淫茎の先からねっとりとした液体が私の手に放たれた。ジルベールの体には汗が浮かび、はあはあと肩で息をしている。

「っ……はあ♡　こうして子種を出すとね、媚薬で体が昂っているのを、早く楽にできるんだって」

（なるほど、それでこんなことを……!）

ジルベールの説明で、私にもようやく男根をしごく意味が分かった。

こうすれば早く治るとわかっていたとして、さすがに王宮医の先生もジルベールの体にこんな処置はできない。かといって私にさせるわけにもいかないと思って、とにかくお水をたくさん飲ませるようにとだけおっしゃったんだわ。けれど、先生がジルベールにその治し方を説明したということは、「ご自分で処置できるならそうなさってくださいね」ということなのでは？　やっぱり私がする意味はないような……？

首を傾げている間も、先端を包み込むようにしていた手にびゅーびゅーと子種が放たれている。ついには手の中に収まらなくなり、手首の方に伝ってきた。

私は慌ててベッド脇に積まれていたタオルをとり、自分の手を清めた。べとべとした感触がなかなかとれない。水差しの水でタオルを少し濡らすとかなりきれいに拭き取れたけれど、これはお湯に浸からないと駄目かもしれない。

とりあえずジルベールの体も清めてあげようと、新しいタオルを水で濡らした。そして拭こうとして気づいた。子種を放った後、すっかり大人しくなっていたジルベールの淫茎が、また首をもたげようとしている。

「あ、あれ？」

「はあ……困ったなあ。何度か出せば落ち着くはずだって先生は言ってたんだけど。僕、もう手が疲れちゃったよ」

「……さっきみたいにすればいいのね？」

「うん！　お願い♡」

疲れてしまったなら仕方ないと思いながら、私はジルベールの淫茎を怖々と握った。先程の苦しそうな様子と比べて随分と良くなったように見えるけれど、こんな介抱を

誰かにさせるなんてとても無理。私が責任を持ってジルベールを治して、今日ここでしたことは誰にも言わないよう後で約束させましょう。媚薬を盛られて仕方なくという理由であっても、女性に介抱してもらったと知られれば同じ年頃のご令嬢から嫌がられるかもしれない。

先程させられた力加減を思い出しながら手を上下に動かすと、ジルベールの淫茎はあつという間に硬さを取り戻した。

「っ♡ あっ♡ リリ姉様、まだ二回目なのにすごく上手……っ♡」

こんなことで褒められても困るけれど、もしかすると遠い将来、役立つ日が来るのかも……いや、「遠い将来」なんてのんきなことを言っているのは、このまま行き遅れまっしぐら。近いうちに役立つ日が来なければ駄目よね。

そんなことを考えながらも肅々と介抱する私に、ジルベールの顔が近づいてきた。

「リリ姉様……もうひとつ、お願いしてもいい♡?」

「なあに?」

「もっと早く治るように、キスもしてほしいな……♡」

「……あのね、ジル。口づけて結婚するお相手と交わすものの。だから——」
私が断ろうとするのを遮るように、ジルベールの唇が素早く重ねられた。

「……っ！」

「ふふっ♡ キスしちゃったから僕と結婚しないとだね♡ 結婚する相手とするんだもんね？」

「もう……誰にも言わないから、こういったことは今後、婚約するご令嬢とだけするよ
うにしないね」

そう窘めて視線を戻そうとするも、顎を掴まれてぐいと上を向かされた。

「何度言ったらわかるの？ リリ姉様は『僕と』結婚するんだよ」

「あなたこそ、何回同じことを言えば——んうっ♡!?」

言葉の途中で噛みつかれるように唇を奪われ、口の中に舌が乱暴に入ってきた。

「ジル、待って……んむっ♡」

体を後ろにひいて一瞬逃げられたのに、ジルベールの腕にすぐ捕まってしまった。ぎゅっと閉じた唇をぺろぺろと舐められ、ふと緩んだ隙に舌でこじ開けられる。

「——んっ♡ ふっ、うっ♡ んうっ……♡」

長々と舌を貪られた後、ようやく放してもらえた。少し息が乱れる程度のジルベールに対して、私はボロボロ。激しい口づけの余韻で頭がぼんやりとし、ジルベールの胸にふらりと寄りかかって息を整えた。そのすぐ下では、完全に止まってしまった私の右手を使ってジルベールが淫茎を扱っている。

「はぁ……♡ まあ別にいいんだけどね。最悪、他の男と結婚しても。そいつを始末して僕がリリ姉様と結婚すればいいだけだから♡」

（なんて危険な発想……!!）

ほ、本当にどうしてしまったのかしらこの子は。これも葉のせいなの？

おろおろとしている私を眺めながら楽しそうに淫茎を扱かせていたのに、しばらくするとジルベールが急に手を離れた。

「あっ……もうよくなった？」

「ううん。なんだか手じや物足りなくなってきたなあと思って……ごめんねりり姉様。

お口も借りるね♡」

「えっ？　口を？」

私の口が開いているところに、ジルベールの淫茎がずぶりとねじ込まれた。

（王女殿下は逃げ切りたい上　サンプル版おわり）

筆者より

『王女殿下は逃げ切りたい 上』サンプル版をお読みいただきありがとうございます！

今回のお話は従姉のリリアーナ王女と従弟のジルベール王太子、七歳差の二人が結婚するのかわしいのかという内容。ちよつと長いお話なので切りの良いところで二冊に分割し、コミック版も鋭意制作中でございます。

サンプル版でピンとききましたら、製品版もぜひよろしくお願いいたします！



サークル名
NatsuMina Novel

ペンネーム
Mina Natsumori
(奈津森 実菜)

